

なまえ のりよ
生江 教代さん

ふくし “きらり人。” に仕事への
思いを語ってもらいました。

生江さんは、芸術療法の一環としてアートセラピーを実施している施設で、アートセラピストとして働いています。

作品づくりのプログラムは生江さん自身が企画し、ボランティアなどの協力を得て、週1回実施し、施設外でも展覧会を開催しています。

以前は美術館で働いていましたが、前任のセラピストからの紹介で、伸びしろのある世界だと感じ、福祉の世界に飛び込みました。

利用者の作品に大きな刺激を受けながら、介護とアートの可能性を考え続ける毎日です。

介護とアートをつなぐ

作品を作る方は、「もっといいものを作りたい」と意欲が高まっているし、外から見ている方も、材料を提供するなどアートに関わるようになり、そこから利用者同士のコミュニケーションが広がっています。

それが、施設全体の明るさに繋がっているのではないのでしょうか。

また、「作品がないとさみしいね」と言ってくれたり、知らず知らずのうちに、アートが施設全体に浸透して来たと感じています。



さらに良いものを作る

基本的にリハビリとして作品づくりをしていくわけですが、アートを職業としてきた分、作品のクオリティをどう保つか考えてしまい、苦しい時もあります。しかし、70代、80代の方が、とても熱い想いで作品作りをしている姿に影響を受けて、それに応えようと一生懸命取り組んでしまいます。

介護の現場は、いろいろな人が集まり、パワーのある職場だと感じているので、ぜひ、見に来て欲しいです。

どなたでもウエルカムです！

